

白樺サロンの会 設立趣旨

〔名称〕

1. 本会を「白樺サロンの会」と称する。

〔目的〕

2. 本会は、奈良高畑界限に残された遺産の継承とその文化の発展をはかることを目的とする。この遺産とは、とくにつぎの二棟の建物（登録有形文化財）を指す。

①志賀直哉旧居

②中村家主屋（旧足立源一郎邸）

〔事業〕

3. 本会は前条の目的を達成するために、以下の事業をおこなう。

①研究会、講演会の開催

②冊子、会誌等、必要な公刊事業

③その他、本会の目的達成に必要な事業

〔会員〕

4. 会員は、本会設立の趣旨に賛同する者をもって構成される。

〔その他の事項〕

5. その他必要な事項について、協議する。

白樺サロンの会の活動

（平成25年～平成26年）

*平成26年度 志賀直哉旧居講座「高畑サロン、ふたたび」

1. 志賀直哉旧居界限の散策 奈良高畑―

弦巻克二 9月1日

2. 夏目漱石『それから』―代助の有り様―

吉川仁子 9月8日

3. 柳宗悦と志賀直哉―日本のモダニズム―

呉谷充利 9月15日

4. 《肖》《像》のはなし

平瀬礼太 9月22日

5. 志賀文学の技巧を探る―『剃刀』『城の崎にて』を中心に―

生井知子 9月29日

6. 続片輪車螺鈿蒔絵手箱の流転

梁瀬健 10月13日

7. 相対論から解き明かす宇宙と生命 橋元淳一郎

10月20日

8. 英国モダニズム作家ヴァージニア・ウルフとキャサリン・

マンスフィールドの描くパーティ 石川玲子

10月27日

編集後記

「草むらの梨の木」作者が少年の頃を思い出して書いた隨筆。

「パーティにおける生と死」ヴァージニア・ウルフとキャサリン・マンスフィールドの作品に拠りながらこのことが書かれていて、この生の祝祭たる場面が鮮やかに浮かぶ。イギリス文学におけるこの社交の形式は深く人間の根本へと届く。生と死。はかなくも美しい。ふと芥川龍之介の「舞踏会」が憶い出された。志賀直哉旧居もまたささやかにこの一場面があつたらう。

「脱衣と着衣の間」明治以降の近代において出現した彫刻の裸体表現がいかに扱われてきたか。手に取るように分かる。いつしか彫刻の側からそれを展示する美術館側に視点が移って、あたふたとした人間模様がみごとに捉えられて主客が替わる。著者によるこのテーマはまた秀逸の人間劇を描くものとして高く評価されよう。思わず笑いがこみ上げる。

「続片輪車時絵螺鈿手箱の流転」なぜ続編か。著者によれば誤りがあったからである。じつはこの名品の時絵手箱は二つあった。それらを取り違えられたのである。歴史の真実に迫ることの難しさが図らずもこの名宝を巡って示唆される。この時絵手箱の顛末が伝承され、記述される。がそれは史実そのものではなかったことが、明らかにされる。

「相對論と主觀的時間」最先端の物理学からのメッセージである。「誰にも共通の（今現在）は存在しない」。相對論の世界は常

識をくつがえす。ブラックホールの不思議な世界はそのまます事であるとして著者はいう。見る人（観測者）がいなければ世界は存在しない。驚くべきことが述べられている。われわれはいつしか物理学から人間自身への問いの前に立たされている。

「文学と科学」著者は文学者に科学を見、科学者に文学を見ようとする。志賀直哉が「暗夜行路」に書く「不安焦慮」は科学にたいする重要な問題を孕む。この文学者の目は深く文明の問題を見据えている。この見方において、さらに物理学者湯川秀樹の歌集「深山木」が取り上げられる。この物理学者の文学の素養を通して、もう一つの科学の意味が述べられる。

「淋しき存在」前号につづく池田小菊のこの未発表作品について志賀直哉は「今まで書いたうちで、今度のが一番い、」「だが、これは、発表することを、好まない」と云ったとされる。小菊の「ありのまゝの事実を書いた、追いつめられた言葉」などの記述に着眼されながら、作品に潜む時代的な奥行きが解説され、吉川・弦卷阿氏の視点は作者である池田小菊その人の実存へと深められている。

「ひらがな考」著者はひらがなという日本独特の文字の成り立ちが漢字の象形性とアルファベットの表音性という表記の二つの形式の間に位置することを述べ、この言語の表現が二人称的対話性と三人称的伝達性の中間に成立する二人称半ともいうべき特質をもつという。一言でいえば表現の手紙的形式である。その文字の形式が日本文学の原理を担っているとす。一文化論の試みである。

(MK 記)